

## 国民国家と民衆運動(覚え書)

今西 一

私はたまたま、一九九五年の九月一五日から一カ月余り、アメリカの大学とドイツの学界を見学する機会を得た。下手なアメリカの印象記から書くと、研究会のあい間をぬって、ニューヨークのメトロポリタン美術館やナショナル・ミュージアムを見てまわり、改めてアメリカが二〇世紀の“帝国”であることを実感した。ナショナル・ミュージアムの展示を見ていると、今日のアメリカの富と繁栄が、マヤ・インカなどからの掠奪と、「インデアン」と呼ばれたネイティブ・アメリカンの人々への侵略のうえに成り立っていることが嫌でもわかる。

またメトロポリタン美術館では、アメリカの富を使って、世界中から買い集められた美術品に、ただただ感動した。一方、そのニューヨークでは、殺人やレイプが日常化してきている。今日のアメリカ社会のなかで、「近代」を批判

し、マイノリティやフェミニズムの問題を議論することの切実さが、一旅行者の私にもよく理解できた。ベルリンでも、ボスニア戦争や旧ソ連の「難民」が流れ込んでおり、貧富の格差が増していることは、一目瞭然であった。

#### アメリカとドイツの日本学

アメリカでは、ニューヨーク州イサカのコーネル大学で、酒井直樹氏とブレット・ド・バリー氏の共催しているセミナーで報告した。アメリカでの印象は、まず大学毎の学問の色分けが、実に濃厚なのに感動した。一言で単純化すれば、ハーバード大学の近代化論に対して、コーネル大学の「ポスト構造主義」論が対極にある、という図式になる。

アメリカ社会では、学問的な言説が、即社会的政治的影響力を持つことになる。アメリカ民主主義の「神話」は、アメリカ「帝国」とハイツサイティー社会を基礎づけてきたものであり、それを根底から批判する「ポスト構造主義」論は、アメリカ社会で最も「危険な思想」ということになる。

しかし、コーネル大学とコロンビア大学のセミナーに参加して、アメリカの若手研究者の成長には驚かされた。院生たちと話していても、フーコーは勿論、デリダ、ガタリ、ドゥルーズなどを自家菜籠中のものとしており、その研究の実証性も相当に高いものであった。もし彼らの研究が日

本語に翻訳されれば、日本の歴史学界や文学学界を根底から揺さぶることになることであろう。日本の歴史学界は、今や「開国」前夜という状態にある。

これに対してドイツの日本学の現状は、逆の意味で驚かされた。ドイツでは、ベルリン日独センターとベルリン・ブランデンブルグ学術アカデミー共催の「アイデンティティとカノン」というシンポジウムに参加した。報告者は、日本側では安丸良夫、田中克彦、亀井秀雄、成田龍一氏、アメリカ側ではキャロル・グラック、ハリー・ハルツウニアン、酒井直樹氏といった錚々たるメンバーであった。しかし、率直に言ってドイツ側の報告のレベルは低いと思っ

た。そして何より意外だったのは、グラック氏や酒井氏が、西ヨーロッパ「普遍」、日本「特殊」という議論を批判した時の、ドイツ側の研究者の猛反発であった。同じことを安丸氏ら日本の研究者が言っても反発しないが、アメリカの研究者が言うのと、ストリートに反発する。ここにも西ヨーロッパ世界のアメリカ蔑視が、露骨に現われている。また、ハルツウニアン氏が折口信夫について報告すると、「折口とハイデガーは、よく似ている。折口はハイデガーを読んだのか」という質問が出されるのにも驚かされた。何でもドイツ西ヨーロッパに源流があって、日本はそれを真似た、というのは何十年前の発想であろうか。

ただ、日本でも「講座」派、大塚史学、丸山政治学が、この西ヨーロッパ「普遍」、日本「特殊」という議論を前提に形成されてきた。そのうえにまた、西ヨーロッパ「近代」、日本「半封建」というバイアスまでかけてきたのである。安丸氏やグラック氏の日本と西ヨーロッパを同じ「近代」として論じる「創られた伝統」論が、この西ヨーロッパ中心史観への重大な挑戦になっていることを、逆にドイツの研究者の反発から教えられた。

### 国民国家の相対化

この西ヨーロッパ中心史観や、「国民国家」の枠組のなかで歴史を考えることを最も批判している論者の一人に、フランス史の二宮宏之氏がいる。二宮氏は次のように語っている。

フランス革命により「一にして不可分の」国家体制をつくり上げたと見做されている国家においても、オック語文化圏としての南フランスは、その独自性を強く主張し、ブルターニュにおいても、ブルトン語を象徴とするケルト文化を掲げてバリの支配に抵抗する動きは根強い。スペインにおけるバスクの独立運動や、ベルギーにおけるフラマンとワロンの言語対立も、その激烈さにおいて、近代国家なるものの内実を露わにしている。他方また、民族自決の原則の下に政治独立を

達成した、第三世界における多くの国々においては、独立後ただちに、深刻な「民族紛争」が激発することとなった。こうした事態は、民族自立の側面からのみ民族解放闘争を捉えて来た視点を裏切るものであったと言えよう（「ソシアビリティの歴史学と民族」『歴史学再考』日本エディタースクール出版部、一九九四年、四五～四六頁）。

フランス革命などの古典的な「民族統一」―「国民国家」論が批判されているとともに、近年の社会主義体制の崩壊のなかでの、中国やベトナムの「開発独裁国家」化という現象は、第三世界の「民族解放運動」なるものを再検討しなければならぬ状況にさしかかってきている。これは勿論、「民族解放運動」をア・プリオリに正しいものと考え、日本のアメリカからの「独立」を、「民族解放運動」としてとらえてきた、戦後の革新運動や歴史学の方法自体にも反省を迫るものである。

また二宮氏は、「十八世紀末葉より十九世紀にかけてヨーロッパを中心に形成されたネーション・ステート（国民国家）を、世界を読み解く基本的な枠組みとしてきたが、そのさい、『階級』と『民族』という二つの概念を、歴史認識の座標軸としてきたといつてよかるう。それは、ますます『ネーション・ステート』を正当化しようとする支配的言説を支えるものであったが、それに対抗する批判的言説もま

た、この点では同じ土俵に上がっていたのだった」（『ソシアビリテ論の射程』『結びあうかたち』山川出版、一九九五年、四頁）と語っている。

同じフランス史の西川長夫氏もまた、イマニエル・ウォラーステインの国家間システム論を引きながら、「日本の自由民権や本来国際主義的であるはずの社会主義運動（反システム運動）が、なぜあれほど国家主義的であったか」を問うている（『地球時代の民族Ⅱ文化理論』新曜社、一九九五年、二〇四頁）。私たちは、自由民権運動の国家主義的性格をつくりだした、国民国家の枠組みについての議論をする必要があるのではないだろうか。

### 民衆運動史の問題

二宮氏はまた、民衆運動史研究についても次のように語っている。「社会運動もまた、階級闘争と民族運動に収斂されることになるが、げんに戦後の社会運動史研究は、このような枠組のなかですすめられてきたのであった。これにたいし、運動を突き動かしていたものをよりの確にとらえるために、運動の背後にある社会的紐帯を、より多元的に、また状況にそくしてとらえようとする視点が提起されてくる。今日流にいうならば、日常的プラテイクに焦点を定めた対象との取り組みが求められたのであった」とする。そこでE・P・トムソンのモラル・エコノミー論や、ミシェ

ル・ペローの「ストライキのなかの労働者」などの研究が、その優れた例としてあげられる（二宮前掲書、五頁）。

日本の近世・近代の民衆史のなかでも、かつてから近代的な「個」か共同体か、という不毛な二元論があった。しかし私は、そうした議論を乗り越えて、今こそ民衆の「日常的プラテイクに焦点を定めた」社会的結合（ソシアビリテ）論を提起することが必要だと考えている。それなしには、今後の民衆運動史研究の前進はないということについては、かなりの人の賛同を得ていると思う。

その場合、ロジェ・シャルチェ氏が語るように、「以前には、民衆文化とエリート文化とを対立させるような、そしてまた階層的な関係を想定するような、かなり単純化した考え方があったがゆえに、文化の多層性を強調する必要があった」という指摘は重要である。

またシャルチェ氏は、「民衆文化については、一方にバフチン流の、独自の象徴体系をもった、一種自足的に閉じられた、かつ生き生きとした世界を想定する見方があり、他方には、ブルデューの議論を押しつめるとそうなりますが、象徴支配のなかにおかれて、もっぱら否定的にしか定義されないとする見方がありました」、「文化における支配被支配関係を見すえううえで、多層性と領有を考えることが必要だ、と思います」（福井憲彦編『歴史の愉しみ・歴史家への道』新曜社、一九九五年、五八―五九頁）とも

述べている。私は、このシャルチュエ氏の言葉は、今日の日本の民衆運動史研究にも、よく当てはまると考えている。

最後に自由民権運動に即した具体的な例をひとつだけあげる。作家の安岡章太郎氏は、高知県西部の幡多郡の各部落に戸ずつ残っている「トマリヤ」という建物に注目して次のように語っている。

いまあるトマリヤのなかには、電線をひいて屋根裏の梁から裸電球をブラ下げたものもあるが、大半は昔のまま、夜になるとランプかロウソクを点けて、それをかこんで若者たちの通過儀礼を語り合うのであろう。そして民権思想も、ここでは世の中全体が新しいものに生れ変わることを夢見て、そうなるための通過儀礼を、覚えたての新しい言葉や横文字なども交じえながら談じ合い、討論し合ったのではないか。

とする。このような民権運動の基盤となったフォークロアが、もっと発掘される必要があるのではないだろうか。また安岡氏は、天誅組総裁の吉村虎太郎が、この幡多郡の山奥の橋原村の出身であることから、「吉村の倒幕思想から民権論までの距離は、ほんのひと跨ぎである」と言う（「民権と風土と人間と」『歴史への感情旅行』新潮社、一九九五年、三七〜三八頁）。安岡氏の名作『流離譚』（新潮社、一九八一年）のように、幕末・維新时期からの長いスパンで、自由民権運動をとらえ直すことが重要な課題

となってきたと、私もまた考えている。

（いまにし はじめ 小樽商科大学教授）